

# 日中戦争期における台湾総督府の占領地協力について

—— 広東を中心に ——

王 麒 銘

- 一 はじめに
- 二 日本人の広東引揚と日本軍の広東攻略
  - (一) 日本人の広東引揚
  - (二) 日本軍の広東攻略
- 三 台湾総督府の占領地統治への協力
- 四 広東省主席と台湾総督の相互訪問
  - (一) 広東省主席の台湾訪問
  - (二) 台湾総督の広東視察
- 五 おわりに

## 一 はじめに

本稿は、日中戦争期に台湾総督府が日本軍占領下の広東統治にどのように協力しようとしたかについて、その内実を政治史的に明らかにするものである。

一九三七年に日中戦争が勃発して、戦域は華南にも拡大し、在留日本人は避難のために引揚を始めることになる。台湾総督府は、対岸の中国から引揚げた日本人や台湾人（台湾籍民）を受け入れた。一九三八年五月、日本軍は廈門を、そして一〇月に広東を攻略した。さらに、日本軍は一九三九年二月に海南島も攻略して同地を占領した。総督府は、これら占領地統治に協力し、人的・物的資源を送り込むことになる。かかる事実は、日中戦争に際しての台湾の持つ地政学的優位と、総督府の動員能力を垣間見せることになった。総督府における広東への協力のしかたに関して、井出季和太（元台湾総督府官僚等を歴任）の叙述をあげることができる。すなわち、「広東及び廈門には応急処理期間中何れも本府より事務官以下の職員を派遣し、その要務に参畫せしめ又は支那側政府に対する顧問官、指導官等の職務に当らしめたのであるが、広東に於ては後之を引揚げ、廈門に於ては興亜院連絡部設置と共に之に転入した」<sup>(1)</sup>（傍線は筆者、以下同様）とし、総督府における廈門への協力は継続的であったが、広東への協力は一時的であったと見られることもできる。<sup>(2)</sup> また、日本軍が攻略した地域に対し、総督府は、占領地経営に協力することになるが、その協力は当然のことながら、軍のコントロール下に展開されたものであり、総督府が独自の裁量で実行できたことは限られ、その役割も限定的であったことは注記しておかねばならないであろう。こうした事情は、戦後、重光葵（戦前外相等を歴任）が、この興亜院の連絡部について次のように回想していることから窺うことができる。すなわち、「青島及び廈門の連絡部は海軍、北京及び漢口、広東は陸軍、上海は陸海軍折半の勢力をもつて、その部署に就いた」「台湾

は、また籍民統治の上から、対岸の福建省に密接な関係を有すると云ふので、福州や廈門の総領事館や興亜院の連絡部を、海軍の実勢力の下に置いた<sup>(3)</sup>としていた。海軍が廈門で、陸軍が広東で主導権を握っていたことを窺わせている。一方、海南島に関しては、当時の日本と台湾では、従前の台湾統治経験を活用すれば、日本をして海南島を支配させることは可能との展望に立ち<sup>(4)</sup>、海南島への進出は、「台湾にとつてまさしくその二倍大への膨張」と<sup>(5)</sup>とらえ、海南島を第二の台湾としようとするような時代の雰囲気が生まれていた。既存の研究成果によれば、海軍特務部の官僚の半数以上を台湾総督府関係者が占めたため、日本の台湾統治の経験が、海南島の民政に活用されていたことがわかる<sup>(6)</sup>。以上のように、台湾総督府の関与の中でも、廈門、海南島に比し、広東に対するそれは必ずしも大きくないと考えられていたこともあり、その内実については、これまで十分に明らかにされてこなかった。

日本軍が広東を攻略すると、同地はにわかには日本人の関心を引くようになり、現地に進出する日本人や台湾人も多くなり、台湾と広東との交流も深まることになる。一九三八年八月、日本から台湾視察に向う衆議院議員の寺田市正は、同船の台湾人の新聞記者の呉坤煌らに、「廈門の次にくる広東も陥落の一步手前にあるとすれば、台湾と一衣帯水の対岸は何と云つても台湾の住人に大に働いて貰はねばならぬ」と語り、台湾人が広東への進出を担う者として期待されていたことがわかる<sup>(7)</sup>。さらに、一九三八年に台北憲兵分隊長に着任した塚本誠によると、彼は、辜振甫を始めとする台湾人エリート青年十数人とともに、「十日会」という会合を作ったが、広東攻略前、「私は広東方面の兵要地誌の研究を十日会の人々に依頼した。彼らは喜んで協力し、約三、四ヶ月でこれを見事に作成し提供してくれたので、私は台湾軍の山本募高級参謀（二六期（陸軍士官学校二六期）に渡し」た。日本軍による広東攻略後、同会の台湾人には「従軍を希望する人が二、三あり、台湾軍はこの人達を高等官待遇の軍属とし、派遣軍司令部の情報部付として徴用し、彼らの志を生かすこととなった」と<sup>(8)</sup>する（一）は筆者による補足、以下同様。台湾の中に広東への進出を期待し、それを実践しようとする人々がいたことを確認できる。日本の占領地が拡大し、それに伴い、広東にいた台湾人の数

は、戦争前の約一五〇人から、四千人を超えるまでに膨れ上がることになる<sup>(9)</sup>。戦後、広東の日本軍とかかる居留民は、同地を接収した中国軍の戦俘管理処の管理下で生活することになる<sup>(10)</sup>。近年の研究によれば、終戦後、広州にいた台湾人が約八千人（この内、軍属が約二千人）<sup>(11)</sup>がいた。戦時中、広東に進出した日本人、台湾人や彼等の事業の内実、その後どういふ運命を辿ったかについては、歴史の研究から欠落している。戦後の台湾では、汪兆銘政権は「偽政権」とされていて、同政権が設けた広東省政府についての実証的研究、さらには、日本統治下の台湾と広東が織りなした歴史は、従前の研究の中でも軽視され回避されてきた<sup>(12)</sup>。

近年、日本と汪政権の関係を扱う先行研究の中で、総督府が広東の日本軍占領地統治に協力したことが言及されるようになって<sup>(13)</sup>いる。しかし、その実態を具体的に分析した研究は、管見の限り未だなされていない。本稿は、日本と台湾所蔵の史料に基づいて、敢えて広東に注目することにより、日本軍の主導下、台湾総督府がどのような役割を果たそうと考えていたか、その内実を含め考察を加えてみたい<sup>(14)</sup>。なお、本稿では、これら占領地域の内、広東を扱うが、それは広州を中心とする広東の沿海部の一部を意味していたことは特記しておきたい<sup>(15)</sup>。

## 二 日本人の広東引揚と日本軍の広東攻略

### (一) 日本人の広東引揚

最初に、近代日本において、広東がどのように位置づけられるか考察の前提として確認しておきたい。そもそも明治から昭和一〇年代中ごろに至るまで、広東に赴く日本人は少なかった<sup>(16)</sup>。昭和初頭になると、満洲事変などで日中間係が悪化する中、広東でも排日運動が起き、広東を離れる日本人は少なくなかった<sup>(17)</sup>。一九三五年の時点で、総領事館、

日本居留民会、日本人小学校、そして広東博愛会医院など、日系の施設は数えるほどしかなかった。<sup>(18)</sup> 経済面でも、広東は、日本との関係が極めて薄い地方と見なされていた。<sup>(19)</sup> このように、日本人にとって、広東はあまり魅力のある土地ではなく、日本人の進出は顕著ではなかったのである。さらに、一九三〇年代の広東は、政治と軍事の実権が地方の軍人政治家から中央の蔣介石へと、いわゆる中央集権化が行われていた。<sup>(20)</sup> こうした内実を有する広東は、近代日本にとって、むしろ中国の革命の策源地や抗日思想の温床として位置づけられていたのである。<sup>(21)</sup> 日中戦争の原因を中国人の排外に求めている人の中には、「広東人は日支関係の癌である」と考える者さえいた。<sup>(22)</sup>

外務省のまとめによると、日中戦争直前の一九三七年七月一日現在、中国に在留した邦人は、八万六九二三人に達していた（日本人は六万二〇二人、朝鮮人は一万二七六六人、台湾人は一万三三七五人）。広東に、日本人は四一九九人、朝鮮人は五三人、台湾人は一四八人がいて、合計六二〇人であった。<sup>(23)</sup> 広東にいた邦人が在中邦人全体の〇・七％にすぎなかったことは、前述した日本と広東の疎遠な関係を示しているといえよう。広東にいた台湾人の数は、一万人前後と推計された廈門にいた台湾人の数とは対照的に、非常に少なかった。

当時の広東総領事は、中村豊一（元国連難民高等弁務官などを務めた緒方貞子の父）であった。<sup>(24)</sup> 中村は、中国人の抗日行為が高揚する一九三七年七月の始めから、居留民の代表者十数名を集めて、中国各地の状況についての情報を提供し、万一の引揚を想定し交通手段の確保も含めた準備を図っていた。<sup>(25)</sup> 七月下旬に入ると、広東の情勢が緊迫してきたため、中村は、中国国民党政権下の広東省政府や市政府などに対して、抗日行為を嚴重に取り締るように申し入れた。同時に、中村は、「交渉に重きを置かず、萬一の場合に為すべき手当はして置かねばならぬので成るべく目立ぬ様に準備を」より一層進めることになり、<sup>(26)</sup> 八月四日頃になると、広東在留日本人婦女女子は任意引揚を開始した。日本人だけでなく、中国側の「軍人家族及資産家ハ広東ニ戦争免レ難シト臆測シ香港及地方ニ避難セル者多ク余漢謀等軍職員ノ家族モ五日夜郷里ニ引揚ケ」た。<sup>(27)</sup> 広東の場合、中国人は、英国の香港か広東の地方に疎開することになるが、日本人に

は、最寄りの香港に行く以外の選択肢はあまりなかった。

結局、広東在留の日本人は、色々な困難を乗り越え、ほぼ全員が引揚げることになる。中村総領事は、在留日本人に二回引揚を勧告した後、八月一五日には、一七日を期限とする引揚を命じた。引揚者は日清汽船の船に乗って、駆逐艦に保護される中、無事香港に到着した。中村自身は、中国官憲、英国領事立会の下、居留民の財産に封印をして、総領事館の国旗を下してから、英国籍の泰山号に乗った。<sup>(28)</sup> 外務省によれば、「居留邦人中の婦女子約八十名は危険を慮りて八月八日香港へ引揚げ、残つてゐた邦人百五十名（男百四十名、女十名）も十七日日清汽船唐山丸で一先づ香港へ引揚げ、其内の大部分は香港より更に長崎へ引揚げた……中村総領事以下館員十二名も十八日夜英国船で香港へ引揚げた」とする。<sup>(29)</sup> このように、明治期から長年にわたり構築されてきた広東における日本人の僅かな基礎は、引揚の断行とともに消失することになった。

## (二) 日本軍の広東攻略

一九三八年になると、日本に有利な戦況が続く中、日本の世論は、漢口攻略あるいは広東攻略を時間の問題と捉えるようになる。雑誌の組む座談会や特集で、「漢口陥落」以後の見通しが語られるようになり、<sup>(30)</sup> 広東攻略についても日本国内において関心が持たれたのは、その証左である。以下、大衆向けの雑誌の主催による二つの座談会を通じて、このことを紹介してみたい。一つは九月一〇日に行われたものである。出席者は、著作家の大石隆基、法学博士の大山卯次郎、海外社社長の神田正雄、著作家の竹内夏積、元全権公使の藤田栄介、同盟通信東亜課長の横田実であった。この座談会では、司会者が「漢口攻略と共に一方こん度の聖戦の目的を完全に達せしめるため―つまり蔣政権をして、あがきのとれないやうにする為に、『南方支那も亦大いに攻略すべし』といったやうな御意見を伺ひたい」と、漢口攻略を好機として蔣介石政権を封じ込めるための南侵を推奨する中で、横田実は、戦局における広東省と湖北省を結

ぶ鉄道の重要性について、次のように述べている。すなわち、「蒋介石の軍事機関即ち抗日軍権は武漢陥落後長沙より更に南に下るでせう。大体粵漢線を離れず先づ湖南省の衡陽か彬州あたりに次の本拠を構へるものと見られて居ますから、さうするといふものは半身不随の状態に陥りながらも、尚香港と結ばれ広東を經由して抗戦力が補給される……広東の対英関係、これに伴ふ海南島の問題など国際関係は愈々複雑化して来ますが、唯だ決意一つ、国民がこれを深く理解し、漢口攻略を以て戦事終りなどといふ誤った觀念に陥ることなく、更に進んで徹底的加撃の必要の理解を深めれば、広東攻略するに足らずであると思ひます」とする。彼の発言からわかるように、漢口攻略と連動する広東攻略は、蒋介石率いる国民政府を粵漢線から切り離すための作戦と見られていた。

もう一つの座談会は九月二八日に行われたもので、出席者は、前出の座談会にも参加した藤田栄介、神田正雄、竹内夏積のほか、東洋協会の井上謙吉、読売新聞東亜部長の村田孜郎、海軍少将の匝蹉胤次であった。この座談会では、「何処から広東を攻めるか」が討論の題目として取り上げられた。この問題をめぐって、匝蹉胤次と井上謙吉は、日本軍がどの場所に上陸して広東まで前進するかについて、意見を交わしている。井上の広東攻略作戦の予測は、実際のそれとほぼ一致することになるが、その場で言及された地名は、機密にかかわる内容として、出版に際しては××が伏せられた。さらにこの二人は、広東の次の攻略目標として、「海南島はやるべき」対象になると想定していた。このように、メディア上において、広東攻略は漢口攻略の次の軍事行動として予測されていて、注目度が高かったと考えられる。加えて、広東攻略の次の軍事行動の対象として、海南島が想定されていたことも確認できた。こうした座談会の企画、参加者の発言内容は、どこまで軍部の意向を体して行われたかについては、史料上の限界のため定かではないが、漢口・広東攻略を想定する世論形成が行われていたことが確認できる。

台湾でも、日本国内同様、漢口・広東攻略への関心が高まりつつあった。総督府の意向を伝えているとされた『台湾日日新報』は、前年の日本人の引揚から、日本軍が広東に対して行い続けた爆撃などを数多く報じていた。このよ

うな言説からは、台湾側でも漢口・広東攻略への期待が高揚していたことを示していた。

実際、広東攻略は、漢口攻略に先立って決行された。この点について触れておきたい。

一九三八年九月初旬、陸軍上層部の中では、漢口攻略と広東攻略の機が熟したとの認識が存在したが、外務当局には、それを慎重にすべきとの意見があった。同月、陸相の板垣征四郎は、広東出兵について、外相の宇垣一成の意見を求めている。宇垣は、広東攻略は「漢口攻略戦と並行せずして寧ろ前後連続して行ふ方が確實且有利而かも外交上にも其間色々と手が打てる」と考えていた。<sup>(34)</sup> 宇垣の戦局観について、外務省東亞局長の石射猪太郎は、宇垣の「内話」を次のように記している。すなわち、宇垣は、「過日凱旋ノ香月（清司）第一軍司令官ノ言ニヨレハ現在ノ日本軍ノ戦備力ハ事変中半減シタル由、夫レハ兵数ニアラス兵ノ素質即チ未教育兵ヤ後備ヲ多ク動員シタルカ為ナリ。故ニ自分ハ或ハ漢口攻略ハ現兵力ニテハシクシリハセヌカ」と心配して、「広東攻略ハ後廻シニシテ広東ヘノ為メニ今上海テ待機セシメテ置クニ箇師団ヲ場合ニヨリテハ漢口ニ注キ込ムノ用意必要ナリ」と述べている。<sup>(35)</sup> さらに、宇垣は、近衛文麿首相に提出した意見書の中でも、「広東攻略ハ漢口攻略後トスルコト政治上ヨリ見テ最モ適当ナリト思惟セラル」と、漢口攻略後に広東のそれを行うべきとの見解を示している。<sup>(36)</sup> こうした考えは、広東周辺の英国の既得権益に細心の注意を払わなければ、外交問題が派生することへの危惧、外交上の考慮があったのである。

同年九月一九日、大陸命第二〇一号が出された。「大本営ハ漢口攻略ト相前後シテ南支那ニ於ケル敵ノ重要ナル策源ヲ奪ヒ其主要ナル対外連絡補給路ヲ遮断スルタメ広東附近要地ノ占拠ヲ企図ス」と、攻略の目的を示すほか、作戦上、「第二十一軍司令官（古荘幹郎）ハ海軍ト協同シテ広東附近ノ要地ヲ攻略スヘシ」「台湾軍司令官（古荘幹郎）ハ第二十一軍ノ兵站ニ関シ援助スヘシ」と、第二十一軍の兵站を台湾軍に期待している。<sup>(37)</sup> 同年一〇月、日本軍は広東のバイアス湾上陸という奇襲を決行することによって、日本中を驚かせることになる。しかも日本軍は上陸してから、僅か一〇日間で広州を占領した。<sup>(38)</sup> 日本軍の攻略の「神速」について、上海から船でバイアス湾まで行つて、そこからトラ



ツクで広東に入った大宅壯一は、「まづ第一に感じたことは、これまでこの方面の戦闘その他に関する報道が、北支や中支に比して非常に不十分であつたといふことである。これは広東が地理的にかけはなれてゐるからでもあるが、日本軍の進み方があまり速すぎたからでもあらう。そのために広東攻略軍は、まるで戦争らしい戦争をしないで広東に入ったかのやうな印象を与へたのである」と書いて<sup>(39)</sup>いる。広東攻略については、日本のメディアにおいても大きく報じられることになる。この攻略の戦果は、内閣情報部が編集した『写真週報』<sup>(40)</sup>をはじめとする、当時注目されたフオートジャーナリズムなどによつても、写真が付され宣伝されていたが、ここでは、日本軍の進撃の速さが強調されている。こうした前線部隊の戦果と並んで、日本国内各地の祝賀風景や、作戦に参加した皇族の秩父宮、共同作戦を指揮した海軍中将の塩澤幸一と陸軍中将の古荘幹郎の姿が紹介された<sup>(41)</sup>。

台湾でも、『台湾日日新報』が、日本軍の広東攻略や台湾の祝賀風景を報じるとともに、社説において同攻略の意義を説いている。すなわち、「北支既に定まり中支一帯また武漢攻略に依つて定まらんとし、残るは抗日意識の強烈なると共に、真日本の姿に就て殆ど識る所なき南支のみであつたが、今次この方面にも漸く暴支膺懲の軍が進められるに至つた」「蔣政権は広東を通ずる第三国の援助に依つて辛くも息をついてゐるのであり、抗日に對する止を刺す為に広東攻略は必然の過程である」と述べて、広東を攻略することで、広東人に日本軍の実力を見せつけるとともに、蔣介石政権への外からの援助ルートが断たれることになつた意義を強調していた<sup>(42)</sup>。これらの言説には、広東攻略を機に、蔣介石政権が降伏することへの期待が滲み出ていた。

実際、日中戦争以来、日本軍が実施した沿岸部の経済封鎖などに加えて、広東攻略の結果、国民政府は、欧米各国の物資や武器を、香港を通じて鉄道で内陸に輸送することができなくなり、蔣介石は漢口を放棄せざるを得なくなる<sup>(43)</sup>。蔣は、広東が日本軍に取られた後、日記の中、武漢がその持つ重要性を失つたこと、たとえ武漢を守つても何れは奪われるであろうと考えて、武漢を放棄し、持久戦と最後の勝利を目指すべきと書いている<sup>(44)</sup>。結局、日本は、漢口・広

東作戦で、国民政府を屈服させることはできなかった。広東攻略後の一九三八年一二月、汪兆銘は重慶を離れ、一九四〇年三月、汪率いる国民政府が誕生した。次章では、日本軍の広東攻略から、汪政権の下にある広東省政府の成立をへて、日本軍の主導下に、台湾総督府がどのようなスタンスで占領地への協力を行ったかについて考察を加えていきたい。

### 三 台湾総督府の占領地統治への協力

前述の広東引揚を実施した中村豊一総領事は、香港総領事に転勤する。香港にいた中村は、広東などの情報を収集し続けて、「両広（香港ヲ含ム）及福建三省ノ出来事ヲ連日記録シ」て、それに基づいて作成した日誌を、外務省本省や台湾総督府外事課等に送付していた。<sup>(47)</sup> 中村は、一九三八年一〇月、日本軍の広東攻略に際し、外務大臣の近衛文麿に次の電文を送っていた。すなわち、「軍ノ広東入ト同時ニ涉外事項鮮カラス発生ノ見込ナルニ付英語ニ堪能ナル領事一名及八谷〔実〕、小幡〔広土〕等ヲ台北ニ待機セシメ同地ヨリ御用船ニ依リ同道赴任開館セシムルコト適当ナリト思考ス尚其ノ際相当数ノ警察官（成ルヘク広東語又ハ英語ニ通スルノ必要アリ）ヲ随行赴任セシムルノ必要アリ予メ御手配願度シ」とする。広東総領事の人選について、中村は内山清を適任としたが、同館再開にあたって、外務省は岡崎勝男を新広東総領事に決定した。<sup>(48)</sup> 日本軍攻略後の広東についての著作を書いた内藤英雄は、岡崎らが日本軍の援助の下に領事館を再開すると、広東に押し寄せる日本人が、一カ月足らずの間に六百名を突破する景況を呈した、と書いている。内藤は、総督府の対応については、「文化部隊」という言葉を使って、次のように解説していた。すなわち、「台湾総督府からは慰問使をかねて玉手（亮二）、佐々波（外七）、柴山（峰登）領事館（事務官の誤植）等が逸早く乗込み、復興の採配をとり、水道、電燈の技術者を始め建設班を組織して新生広東の再建を図った。博愛医院の復活の

目的とし下條（久馬二）、山中（寛）両博士が乗込み、また渡田（栄二）広東小学校長も、従来の小学校に公学校を併置する外、日本語講習所を開設した<sup>(49)</sup>と、その梗概を描いたが、総督府は日本軍占領地でどのような役割を果たそうとしていたか。以下、この点について明らかにしていきたい。

一九三八年九月、台湾総督府が作成した「広州処理方針」は、広州において台湾が果たす役割について、「綱領」「応急的処理方策」「建設基礎方策」の項目において説いていた。「綱領」では、「広州方面の処理に付ては軍の作戦目的達成に協力すると共に広州市の南支に於ける政治的、経済的特殊地位に鑑み之に対する強力なる政治的支配権を把握し帝国の対南支工作の中枢たらしむると共に逐次附近諸地方の資源開発及び我が経済進出を図るを以て主眼とす」と、総督府が関与し貢献することが示されていた。「応急的処理方策」では、民政事務に対する参画、警備及び治安維持、医療及び防疫、情報宣伝、宣撫班の組織、教育、公共施設の応急復旧及び経営、交通機関の整備、通信施設、租税に対する臨時措置、海関の接収、金融、物資供給計画、敵産管理、基本調査の実施と、一五の項目に取り組み際の重点や原則が書かれている。「建設基礎方策」<sup>(50)</sup>では、政治及び行政一般方策、広州特別市の機構及び行政、広州市を中心とする産業振興計画について書かれている。九月の段階で、総督府はすでに広東攻略に備えて準備を整えていたことがわかる。このように多方面に及ぶ処理方針の背景には、日本軍の厦門攻略後の総督府による占領地協力の経験が生かされていたと考えることができる。

一方、一九三八年一〇月、陸軍大臣と海軍大臣と外務大臣の間で、「南支作戦二伴フ政務処理要綱」が決定され、かかる三省の主導の下、政治指導や経済指導を行うとされていた。政治指導では、治安維持会の育成や、民心の「日依存」への工作などを目指し、経済指導では、「我国資本及資材ニ依ル新ナル建設ハ貿易振興並対華僑工作等特ニ必要ナルモノニ限定スルを本旨」としている。さらに、第三国関係については、英国との関係を重視して、「英国ニ対シテハ特ニ既存ノ權益ヲ認メ敵ニ問題ノ発生ヲ避クルト共ニ彼ヲシテ蔣政権援助ノ方針ヲ棄テ帝国ノ政策ニ順応セ

シムル如ク適宜施策ス」とする。そして、三省が組織する広東連絡会議は、占領地の政務処理の最高機関であることを決めている。<sup>51)</sup>

台湾総督府は、この広東連絡会議に参加する希望を持っていたが、陸軍、海軍、外務省の三省はこれを受け入れなかった。一九三八年一月、台湾軍参謀長の天津和郎は、陸軍次官の東条英機への電報の中で、総督府を広東連絡会議に入れるには、「三省会議ニ拓務大臣（総督府の中央主務官庁）ヲ加フル問題ヲ先ツ解決スルヲ要シ軍司令部ニテハ取計ラヒ難ク又事務簡捷ヨリモ寧ロ拓務関係者ヲ事変処理ニ干与セシムル前例ヲ作ル方ノ害大ナラン」とする。つまり、三省合同の現地機関だけで十分である、と説明していた。この広東の現地機関は三省によって運営されていたが、三省各々がどのような思惑を持って参加したか判然としないが、上記の三省の枠組みが継続的に続いたことは文書で再確認することができる。すなわち、一九三九年五月、有田八郎外務大臣から、漢口、広東、海口の三領事に対し、「漢口、広東及海南島各方面重要事項処理ニ関スル陸、海、外三省及興亜院申合ノ件」の内容説明が送られている。そこでは、「右地方ニ於ケル政務処理ハ夫々外、陸、海三大臣決定ニ係ル政務処理要綱ニ基キ現地連絡会議ニ於テ処理セラレ居ルモノナル処今般ノ申合ハ右三大臣決定ヲ改ムルモノニハ無之」と、外務省の立場が示されている。同年七月、興亜院会議で、「漢口及広東ニ連絡員派遣ニ関スル件」が決定された。ここでは、漢口、広東両地派遣員は、現地三機関の会議に出席し連絡に任すとされている。翌月、この件に関して、陸軍次官は中支那派遣軍参謀長、第二一軍参謀長へ、次のように通牒を送った。すなわち、「本件ハ漢口及広東方面ニ対スル政務処理方針ニ何等影響ヲ及ホスモノニ非ル<sup>52)</sup>」と書かれている。このように、基本的に広東政務をめぐって、三省が主導し、総督府は補完的役割に止められることになる。

前述したように、一九三八年一月、陸軍次官は、台湾軍参謀長からの電報を受け取ったが、同次官から台湾軍参謀長への電報の中で、広東連絡会議は、「総督府ノ関与ヲ許スヘキ筋合ニアラス、但シ政務指導ノ局部的ノモノハ電

政又ハ放送ノ如ク台湾総督府ヲシテ援助セシムルコトアルヲ以テ之ト緊密ナル連繫ヲ保チ遺憾ナキヲ期セラレ度」と書いたほか、「海軍、外務モ概ネ異存ナシ」と書かれている。<sup>(55)</sup> 日本軍は、「電政又ハ放送」事業への総督府の貢献を期待していたことがわかる。こうして総督府は軍の要請に応じて、インフラの整備など、限定された領域への協力に携わることになる。例えば、一九三九年一月、南支派遣軍は、陸軍省と海軍省と外務省の間で決定された「広東ニ於ケル放送処理要項」に関連し、広東放送局を建設するに際し、「設計並工事監督ニ就テハ軍ヨリ台湾総督府ニ委託ス」「建設後ニ於ケル運営ハ当分ノ間台湾放送協会ニ委託スルコト」としていた。<sup>(56)</sup> また、同年三月、広東連絡会議が作成した「広東市電気水道復興要綱（決定案）」の中で、電力廠及び水道廠は、「暫行的ニ台湾総督府ニ委託経営スルモ新会社〔日中合弁の会社〕成立ノ上ハ直チニ之ヲ移管セシム」と、インフラ整備の過渡期における総督府の役割を定めている。<sup>(57)</sup>

さらに、文政面において、総督府への期待はより大きなものがあつたと考えられる。総督府は、陸軍の出先機関の要請を受け、次のような役割を果たした。例えば、一九三九年二月、日本陸軍の広東陸軍特務機関が決定した「南支那人小学校教科書編纂要領」によれば、同機関の方針は、「中、北支ノ教科書ヲ骨子トシ之ニ南支ノ特性ヲ加味スルト共ニ日本ノ実相ヲ認識セシメ以テ防共親日ノ基礎ヲ涵養ス」ることを目指したが、ここでは総督府に次のような役割を期待していた。すなわち、「台湾総督府南支教育調査会ノ調査研究シタル資料ヲ利用シ且同調査会並編修課ノ協力ヲ得テ台北ニ於テ五月末迄ニ概略ノ編纂ヲ行ヒ爾後広東ニ於テ支那側当局ト協議完成ス」とする。<sup>(58)</sup> この教科書編纂の中心人物となつたのが菅向栄（台湾人の徐向榮）<sup>(59)</sup> であつた。一九三九年二月、菅は広東治安維持委員会の招聘を受けて、小学校教科書編纂委員会主任委員となり、総督府文教局の後援の下、各教科書を編纂する。この作業は同年三月に始まって、五月に脱稿した。完成された教科書は、九月の開校日までに、全部で三〇万冊を印刷することにな<sup>(61)</sup>る。このように、戦時下広東の初等教育用の教科書編纂に従事した菅は、「南支方面の小学校教科書編纂を僅々三ヶ

月を以て編纂せる等、其功績は真に驚歎に堪へざるものあり、從七位功六級に叙せられたるが、任務を終りて帰京するや、荒木貞夫大将より絶大なる讃辭を受けたりと聞く、と評価されるまでになる。<sup>(62)</sup>

さらに、広東陸軍特務機関は、教科書を一新するとともに、広東の教員を訓練するため、優良教員を選抜採用し広東の教員訓練所に入所させていた。<sup>(63)</sup> 同機関は、広東の小学校教員の質向上を目指していたが、彼等の再教育のため、男子教員一九名、女子教員六四名を選抜し、台湾に派遣して、実地指導を受けさせていた。<sup>(64)</sup> これらの事実からは、広東での新教育の展開において、総督府の協力と台湾の人材の活用が図られていたことがわかる。

こうした初等教育だけでなく、台湾総督府は、台湾に派遣される広東人の教育にも尽力する。警察に関しては、一九三九年から一九四二年にかけて、四回、計八二名が台湾に留学し、<sup>(65)</sup> 農業分野に関しては、一九四〇年にも六人が台中農業学校に留学した。<sup>(66)</sup> 看護婦に関しては、一九四一年に二回にわけ、計八人が台北帝国大学医学部や附属病院で約三カ月の研修を行った。<sup>(67)</sup>

ここでは、広東から台湾への留学生の一例を紹介しておきたい。一九四二年に、一七人の広東省の留学生が台湾に派遣されたが、<sup>(68)</sup> 留学生たちの引率をしたのは、広東女子美術職業学校長の原田武子であった。原田は、東京女子美術専門学校刺繡科の卒業生（一九一九年卒）で、東京薬学専門学校の中国人留学生と結婚して、一九二〇年に広東に渡り、各学校で手芸科や日本語を教えて、一九三四年に私立敏存職業学校を開設した経歴を持つ。日中戦争後、原田は、亡夫の実家（南海県沙頭）に避難したが、「漢奸」（民族の裏切り者）と目される虞があるため、翌年、香港に移り、香港日報社の通訳として働いていた。日本軍の広東攻略後、原田は二児を連れて、軍の通訳として同地へ帰り、宣撫工作に従事しながら、広東女子美術職業学校の創立に着手した。約二〇年の広東経験に加えて、日中戦争後の活動ぶりや、<sup>(69)</sup> 次男も留学生の一員になるなど、引率者として適任であった。<sup>(70)</sup> 留学生は、台北市内の興亜寮に寄宿し、日本語を学び、入学の準備をした。<sup>(71)</sup> この時派遣された中国人留学生の中には活躍する者も出てくる。例えば、戦後、アメリカの大

学の教壇に立つ数学者の霍崇熙はその一人である。<sup>(72)</sup>このほか、台北高等学校に進学した呉鉄堅や、台北帝国大学附属医学専門部に進学した康保敏などがいる。<sup>(73)</sup>

後述するように、一九四二年一月、広東省主席は台湾総督を訪問した時、広東から台湾に派遣された警察官や留学生が世話になったことに対し謝辞を述べた。しかし、終戦直後、台湾をめぐる政治的環境が一変し、汪政権派遣の中国人留学生は微妙な立場に立たされ、苦境に陥ることになった。<sup>(74)</sup>

#### 四 広東省主席と台湾総督の相互訪問

##### (一) 広東省主席の台湾訪問

日本軍の広東占領後、日本の種々の要人の広東視察が行われることになるが、一九四〇年四月に広東を視察した拓務大臣の小磯国昭はその典型である。小磯は、台湾南部の高雄から海軍飛行機に便乗して広東視察に向かった。彼は、「軍司令官安藤利吉中将以下多数の出迎を受けて着陸し、軍司令部指定の宿舎に入り、翌日から広東に在る陸海軍両司令部を訪問して政府からの慰問の誠意を伝へ、佐藤賢了参謀長の案内で碇泊場司令部、広東防衛陣地の情況、広東市街の視察等を遂げ、尚、一般戦況の説明をも聴取した」<sup>(75)</sup>が、「南寧方面第一線往訪をも之を略」せざるを得なく、三、四日間の広東滞在の後、次の海南島視察に向かった。<sup>(76)</sup>一九四〇年五月、汪政権下の広東省政府が成立すると、その視察は活発に行われるようになる。広東総領事館警察署の「知名人士来往状況」報告によれば、同年五月一日から六月二〇日までの間、衆議院議員だけでも、小山倉之助、松本忠雄、芦田均、田中亮一、福田悌夫の名前を見出すことができる。<sup>(76)</sup>芦田の日記によれば、五月一四日に澳門から広東に到着し、一六日には市長の彭東原と広東省主席代

理の陳耀祖を訪ね、広東から台湾滞在をへて日本に帰っている<sup>(77)</sup>。かかる政治家の広東視察は、中国視察の一環として行われて、日本軍慰問と各地の要人との接触が主たる目的であった。

当時広東省のトップを務めていたのは、汪夫人陳璧君の実弟である陳耀祖であった。陳は、広東省代理主席を務めて、省政の運営を任されていた<sup>(78)</sup>。彼は、一九四四年四月、重慶側の「暴力団」員に暗殺されるまで、省政の運営を四年間ほど担当していた<sup>(79)</sup>。この間、一九四二年一月、陳は台湾を訪問したが、これは日本軍の要請を受けて行われた日本視察の一環であった。

日本は、広東に対する政治工作で、「粵人治粵ノ方針ヲ尊重<sup>(80)</sup>」すると強調し、広東人が広東を治める形にした。一九三八年二月、彭東原を委員長とする広東治安維持会の発会式が行われた<sup>(81)</sup>が、この会の関係者をはじめ、戦時下、広東の要人は日本視察・訪問を行っていた。例えば、①一九三九年五〜六月、広東治安維持会委員廖銘を団長とし、南支派遣軍囑託の橋善三が案内者を務めた広東訪日経済視察団、②同年六〜七月、同会副委員長の呂春榮の夫人の劉慧瓊を団長とし、南支派遣軍囑託の小堀栄一が案内者を務めた広東婦女訪日団<sup>(82)</sup>、③同年一〇〜十一月、同会副委員長の呂春榮一行の北支、満洲、朝鮮、日本各地視察団<sup>(83)</sup>、④一九四〇年一〇月、広東省東区行政督察專員の陳光烈を団長とし、連絡官の桂五郎が引率した潮汕地区訪日視察団<sup>(84)</sup>、⑤同年一〇月、紀元二千六百年式典に参列するために東京に来ていた広東市長彭東原<sup>(85)</sup>、⑥同年一一〜一二月、広州市立教育局督学官の李継唐を団長とし、広東陸軍特務機関広州市政府連絡官の高橋勉が引率した視察団<sup>(87)</sup>、⑦一九四一年一月、広東省教育庁長の林汝珩を団長とした日本教育視察団があった<sup>(88)</sup>。その殆んどは、台湾経由で日本に行っていた。彼らは日本の主要な都市や施設と、日本の統治下の台湾を訪問することで、日本の政治家や実業家などと交流を深めるとともに、その途中、在日華僑に対しても、日本指導下の広東の安定を説いていた<sup>(89)</sup>。

こうした一連の視察団の中でも、陳は省主席であっただけに、彼の台湾訪問には格別の意味があった。陳によると、



台湾訪問は、陸軍特務機関の矢崎勘十少将の提案に由来したという。矢崎は、一九四〇年三月に広東特務機関長を務めていたが、その後、香港総督府総務部長を経て、一九四四年八月に南京政府最高軍事顧問となる。こうした経歴からも明らかのように彼は、日本と汪政権の間で重要な役割を果たした人物であった。<sup>(90)</sup> 陳は汪の許可を得て台湾を訪れていたが、それは台湾からの援助の獲得や、台湾当局との連絡などが当面の急務であるとの、矢崎の提案を受けてのものであった。ここでは、陳の台湾訪問の詳細について、『広東迅報』に基づき整理しておきたい。同紙は、日本軍の広東攻略の直後、台湾の新聞人である唐沢信夫が発刊した漢文新聞であった。<sup>(93)</sup> また、現地の日本人のために、附録として和文版も発行したが、「同名では良くないので、四月二十九日天長節のお芽出度い日に南支日報に変」えた。<sup>(94)</sup> このように同紙は、漢文版と日本語版の両方が出されていたが、広東を視察した日本人が異口同音に同紙を称えたように、日本側に立ったメディアであった。<sup>(95)</sup> 例えば、ジャーナリストの野依秀市は、「民衆を率ゐる点に於て偉大な使命があるのだから前途甚だ有望」と、元衆議院議員の山田毅一は、「広東迅報が、南洋華僑に呼びかける、その力は偉大である」と書いている。<sup>(97)</sup> このように広東人及び南洋華僑へのプロパガンダとの役割を有する同紙であったため、その利用には注意が必要であるが、陳の台湾行の詳細を報じているので、同紙によりこの陳主席と台湾総督との交流を見ていきたい。

一九四二年一月二日、陳耀祖広東省主席は空路で台湾へ赴き、長谷川清台湾総督、安藤利吉台湾軍司令官等を公式訪問した。随行者は、建設庁長の張幼雲、省政府秘書長兼広州市長の周応湘、外交部駐広東特派員の周秉三、駐広州綏靖主任公署参謀長の鄭洗薰であった。初日の夜の記者会見で、陳は、総督府や台湾軍と折衝して、台湾との連絡や経済提携について具体的に討論するのが、台湾訪問の真意と述べていた。また、陳は、日本軍が広東側に工場を返したことに感謝した。すなわち、一九四〇年一〇月、日本軍の管理下に置かれた九つの工場は還付され、「紡績、肥料、硫酸曹達、製紙、製糖の五工場は中国側の直接経営となし、残余の電力、水道、洋灰、麦酒の四工場は日本側業

者による委任経営によつて運営を継続してゐ」くことになり、委任運営を担当した日本側業者は、台湾電力会社、台湾拓殖会社、浅野セメント会社、大日本麦酒会社であつた。<sup>(98)</sup> 陳は、関係会社の経営により、工場の業績が非常によくなつたことに對して感謝を示した。<sup>(99)</sup> 二日目に、一行は台湾神社と護国神社を参拝して、陸軍病院や博物館、台北市内の参観を終えて、総督の招宴に出席した。陳は宴会の席上、広東の台湾関係の病院が多くの中国人患者を診療したことに、広東から台湾に派遣された警察官や留学生が世話になつたことなどに対し謝辞を述べた。<sup>(100)</sup> 三日目は、台北帝國大学などの参観を終えて、軍司令官の招宴に出席した。四日目は、総督府専売局などの参観を終えて、実業界懇談会の招宴に出席した。<sup>(101)</sup> 五日目は、台北近郊の草山（現在、陽明山）に足を伸ばして名勝を遊覧した。六日目、陳は草山に残つたものの、他の随員は実業界との懇談を行つた。<sup>(102)</sup> 一週間ほど台湾に滞在して広東に歸つた陳は、台湾訪問の感想を聞きに来た記者に對して、日本の台湾統治を模範として学べるところが多いこと、今後台湾との関係がますます發展することを期待していると述べた。陳は省政府の礼堂で、三百人以上の官僚等に對して、台湾訪問の経過について説明し、汪兆銘に對しても、台湾総督が広東への援助を約束したことや、台湾軍司令官が、台湾で広東發展への援助に尽力するのみならず、東京の方でも広東のために協力すると語つたこと、一行が台湾での見学に感銘を受けたことなど、台湾視察についての報告を行つた。<sup>(103)</sup>

総督府は、陳への答礼として、総務長官の斉藤樹が広東を訪問することになつた。斉藤の広東訪問について、『広東迅報』は社説で歓迎の意を示すとともに、「技術人才、工業原料、商業資本等」の援助の拡大や、「海上交通、物資交換等」の具体的な案作成の必要性を説いてゐた。<sup>(104)</sup> 一月九日、海南島視察を終えた斉藤は広東に行き、広東省財政庁長等の中国人、矢崎特務機関長、総督府出張所所長、広東迅報社長の唐沢等の出迎えを受けた。斉藤は、広東神社の参拝を終えて、台湾関係者や陸軍特務機関、報道部、憲兵隊本部、海軍武官府等を視察訪問した。翌日には、省政府、総領事館、市政府、台湾関係の各施設を視察訪問した。斉藤は、慌しい日程の中、陳主席、日本軍の最高指揮官、

新聞記者等と会っていた。一日、斉藤は香港視察に赴いた。<sup>(106)</sup>

こうした陳主席の台湾訪問は、『広東迅報』以外にも、広州で発行された汪政權下の中国語新聞『中山日報』によっても報じられていた。<sup>(107)</sup> この訪問を通して水面下で何が会談されたかは、他の資料の発掘による検証が必要であるが、少なくとも同紙を通じ、省主席の台湾訪問と答礼としての総務長官の広東訪問は、「日支親善」「新東亜建設」などの謳い文句の下、広東と台湾との親善と交流の促進をアピールしていたのである。

## (二) 台湾総督の広東視察

日中戦争の前後、日本人の引揚や中国人の避難などにより、広東の人口は、その変動が大きかったため、正確な数字は把握しにくい。当時の新聞や雑誌を通観すると、人口は一時的に半減したが、恢復は意外にも早かったとの観測が多く、その具体例として、日本旅行協会の雑誌記事をあげることができる。すなわち、「事変前百二十萬の人口を有して居つた大広東市も、一時は、その人口も半に減じた、が今やその人口は六十萬を超え……抗日の本場であるにも拘らず対日感情は思つたよりもい、日支共存共栄の理想の下にあの南国的の近代都市広東が昔の姿に帰るのも遠くはないであらう」と、広東が本来の繁栄を取り戻したかのようなことを日本国内外の読者にアピールしていた。一九四二年七月現在の統計データでみると、華南における在留日本人は一万七六七七人であった。その中で、広東は九四三〇人、海口は五〇七五人、廈門は二〇五六人、汕頭は一〇六六人、澳門は五〇人、の順であった。さらに広東にいた台湾人は四六六三人、朝鮮人は五五一一人であった。広東にいた在留邦人は、日中戦争前のそれと比べれば、二〇倍以上の伸び率であった。<sup>(108)</sup>

広東における日系実業者の成長状況について、外務省通商局が作成した調査報告に基づいて見ておこう。一九三七年一月二月現在の「在外本邦実業者調」によれば、在広東総領事館管内の日系実業（銀行、会社、洋行など）で、同年八

月までの取引高が一万円以上に達した社数は、計二九社であった。<sup>(10)</sup> 日本軍の広東攻略後、一九三九年二月現在「在外邦実業者調」によれば、在広東総領事館管内の日系実業で、一年間の取引高が一万円以上に達した社数は、計二〇七社（広東市一八四、広東市外二三）であった。<sup>(11)</sup> 会社の数だけで見ると、一〇倍ほど成長したことがわかる。<sup>(12)</sup> 一九四一年八月二〇日時点の調査によると、台湾総督府広東出張所や博愛会、共栄会など、台湾関係の機関で、広東に投資した金額は一三三万以上に上った。また、台湾電力広東支店や台湾拓殖広東支店など、台湾関係の実業団体で、広東に投資した金額は八三〇万以上に上った。総計九六四万余であった。<sup>(13)</sup> 総督府をはじめ、台湾関係の機関と実業者が投下した資本、扱った物資などは、従前の日本と広東との薄い経済関係をより緊密にすることになる。かかる政治的、経済的情勢の転換に伴って、現地に暮らしていた日本人の社会が形成されたのである。

一九四〇年十一月、元海軍次官等を歴任した長谷川清海軍大將が台湾総督に就任した。<sup>(14)</sup> 翌月、長谷川は、神戸出帆の大和丸に乗って台湾に赴任する。<sup>(15)</sup> 前述のように、この時点で、廈門、広東、海南島は、すでに日本の勢力下にあった。<sup>(16)</sup> 長谷川は総督在任中に華南視察を実現させるが、以下その内実を明らかにしてみたい。

一九四二年六月、長谷川は廈門の視察を行うことになる。彼は、廈門神社を参拝して、鼓浪嶼で対岸の中国陣地についての説明を聴取した。<sup>(17)</sup> 廈門で撮られた写真は、興亜院廈門連絡部によって、『長谷川台湾総督閣下廈門視察記念写真帖』としてまとめられた。そこには、出迎えの李思賢廈門市長や福田良三興亜院廈門連絡部長官等の姿、長谷川が視察した海軍の上陸地点、至誠会、学校、病院の様子を見ることができるとある。<sup>(18)</sup> また、同年八月、長年廈門にいた台湾関係者が、『廈門台湾居留民会創立三十五週年記念誌』を編纂した際、長谷川総督が興亜院廈門連絡部と総領事館を訪問した時の写真を記念誌に掲載したことからも、台湾総督の廈門視察がいかに重要視されていたかを確認できる。<sup>(19)</sup>

翌一九四三年四月、長谷川は、海南島、広東、香港の視察を行うことになる。四月一三日、総督一行は空路海南島に赴き、石碌鉄山建設工事などを視察した。案内世話役をしたのは、海南島開発事務部次長の河野司であった。<sup>(20)</sup> その

後、長谷川は海南島北部の海口などを視察して、広東に移動した。<sup>(12)</sup> 一日、彼らは広東に到着、日本側の南支軍最高指揮官等の要人、台湾関係者、そして陳耀祖をはじめとする中国側の要人に出迎えられた。総督一行は、広東神社参拝の後に訪問・視察活動を行った。<sup>(13)</sup> 二二日、長谷川は日本占領下の香港に赴いて、磯谷廉介香港総督等の訪問や見学を行い、二四日に帰任した。<sup>(14)</sup>

『台湾日日新報』の社説は、台湾の対岸関与の視点から、明治期に台湾統治の基礎を固めた児玉源太郎の後継者として、こうした長谷川の行動を称賛している。さらに同社説は、元総督の川村竹治（一九二八～翌年在任）<sup>(15)</sup>の企図として計画された南洋訪問についても言及し、長谷川の代によりやく実施できた初めての総督の海外視察を高く評価している。すなわち、「台湾総督として海外視察に向つたことは、長谷川総督を以て最初とするが、曾て此の種の計画が無かつたかといふと必ずしも然らずであり、児玉総督時代には、福建省不割譲問題等をめぐつて可なり積極的な動きを見せ、又川村総督も親ら南方方面に視察を遂げんとする企画を樹てたかに聞き及んでゐるが、実現を見るに至らずして任を去つた。さういふ意味で今回長谷川総督の南支方面における視察行は台湾統治史の上に一時期を劃したものであり、大東亜戦争下における台湾の使命や立場については、万人等しく再認識を要するものと思料される」、<sup>(16)</sup>とす。この社説以外にも、「各現地当局の心からなる歓迎振りに接しこれは独り長谷川総督に対してではなく台湾全体に対するものとして誠に感銘深いものがあつた」と、未曾有の快挙を成し遂げた総督として、これを評価した。<sup>(17)</sup> 同年六月号の雑誌『婦女世界』（広州、協栄印書館出版）には、四月に広東神社を参拝した大東亜省大臣青木一男の写真と、陳耀祖を訪問した長谷川総督の写真が同頁に掲げられている。陳から汪兆銘への報告によると、南方視察の途中、広東を駆け足で訪問した青木は、「慈善救済費」として国幣一万元を、広東総領事を通じて広東省に贈つた、とする。<sup>(18)</sup>

日本・台湾と汪兆銘政権下の広東が、「日華提携」という構図で合流した瞬間は、この頁の写真が象徴していた。

このように、長谷川台湾総督は、一年以内に二度の華南視察を行い、日本側の興亜院廈門連絡部長官や日本軍の指

揮官、中国側の廈門市長や広東省長をはじめとする要人等と交流を深めるとともに、建設中の工事などを視察することにより現地の資源、これら地域に進出した日本人と台湾人の状況を的確に把握することができたと考えられる。当該期、太平洋上における日本軍は劣勢に転じつつあった。これに伴い、長期化し泥沼化する中国戦線への戦力の充当は困難な状況に追い込まれていく。日本軍占領下の華南地域、さらには、同地域を通じた中国戦線への支援をめくり、地政学的近さにあった台湾への期待が増大したことは想像に難くない。長谷川の広範な華南視察は、かかる期待を背景に行われたと考えられる。

台湾総督自身は、南洋視察に行くことはなかったが、総務長官の齊藤樹はこれを行ってきた。一九四二年五月、齊藤は約二週間のフィリピン視察を行った。さらに、一九四三年八月、彼は約一カ月間で、「比島、ボルネオ、ジャワ、昭南、スマトラ、仏印の各地を廻り現地軍幹部をはじめ本島出身の司政長官或は民間人等」と意見交換していた。<sup>(28)</sup> このように、戦時下に、総督が企図した「南支」視察と、総督を代理した総務長官の「南方」視察によって、総督府上層部の「南支南洋」地域における行動領域は広がったものの、それは従来の総督の「南洋訪問」の中で期待されていた総督同士の交流とは異なるものになっていた。

## 五 おわりに

以上、本稿は、日中戦争期台湾総督府における日本の占領地広東への協力について、総督府の役割を時代の脈絡の中で解明してみた。

日中戦争前まで、広東に在留した日本人が数百人しかいなかったことが示すように、日本と広東の関係は浅く、地盤といえるようなものは築かれていなかった。日中戦争の直後、日本人の引揚によってかかる僅かな勢力もほぼ完全

に失われていった。しかし、戦争が長期持久戦態勢に入るなかで、日本内に広東攻略論が生まれることになる。日本軍は、戦争解決への一手段として広州攻略の準備をし、一九三八年一〇月にそれが実施され、蒋介石率いる国民政府が海外の援助を取り入れる拠点としての広東は、日本の占領地となった。このように、戦局の進展によって、広東は日本人の注目の的となったのである。

台湾総督府は、日本軍の占領地経営への協力と、それを実現するための諸準備をしていた。総督府にとって、短期間でそのための動員をすることは、時間的にも物質的にもそれほど難しいことではなかった。しかし、陸軍、海軍、そして外務省の間の現地機関である広東連絡会議が主導権を握ったため、総督府の役割が限られたのも事実であった。占領統治の骨格になる軍政分野に関与することには制限と限界があった。他方、広東のインフラ整備への援助や、医療水準の向上への貢献、学校教育で使われる教材への編纂協力、広東省派遣の留学生など、民政面での関与や協力体制が構築され実行に移されていった。

さらに、広東省主席の台湾訪問と台湾総督の広東視察を分析することにより、両地のトップの意思疎通ができていたことを確認した。このように台湾と広東が政治的に接近する過程を、長年台湾に眠っていた広東関係資料、とりわけ台湾総督府図書館の資料を受け継いだ国立台湾図書館所蔵の『広東迅報』や、種々の視察団の活動を記した報告書とともに、中華民国国史館の檔案を用いることにより解き明かした。日中戦争が泥沼化する中で実現した軍出身総督の広東を含む華南視察については、従前の民政面だけでなく兵站をはじめとする軍事面での台湾への期待が高まっていたことを推量することができる。しかし、かかる交流の水面下で具体的に何が目指されたかについては、資料の制約により、残念ながら明らかにすることはできなかつた。今後の課題としたい。

- (1) 井出季和太『南進台湾史』(誠美書閣、一九四三年)一八〇頁。
- (2) 廈門占領地への台湾総督府の協力については、王麒麟「日中戦争期における台湾総督府の占領地協力について——廈門を中心に」『法学政治学論究』第一〇〇号(二〇一四年三月)に詳しい。
- (3) 重光葵『昭和の動乱 上』(中央公論社、一九五二年)一八五、一九四頁。
- (4) 一例としては、「日本人にやらせれば十年にして出来る、台湾で経験したことを以て台湾よりもつと早く行く」との記述をあげることができる(横尾惣三郎『我が南進国策の根本義』財団法人拓殖奨励館、一九三九年、四頁)。また、一九三九年二月に海南島を視察した大橋忠一(満洲国外交部次長などを歴任)は、海軍の前田稔大佐から聞いたことを次のように記している。すなわち、「海南島は当初言はれし様な宝の山でもなく又或る人の云ふ様な不毛の土地でもない。今後人力を加へる事に依つて台湾程度のものにする事は困難ではない」とする(小池聖一、森茂樹編集・解題『大橋忠一関係文書』現代史料出版、二〇一四年、一七九—一八〇頁)。
- (5) 西澤基一「香港・海南島を中心とする南支那の国際関係」『赤誠』第五輯(高雄州臨時情報部、一九三九年)五頁。
- (6) 海南島占領地への台湾総督府の協力については、鍾淑敏「植民と再植民——日本統治時代台湾と海南島の関係について」(松浦正孝編『昭和・アジア主義の実像——帝国日本と台湾・南洋・「南支那」』ミネルヴァ書房、二〇〇七年)に詳しい。日本占領下の海南島についての近年の研究は、河原林直人「一九三九年・「帝国」の辺境から——近代日本史における「植民地利害」の一考察」(『日本史研究』第六〇〇号、二〇一二年八月)があげられる。
- (7) 呉坤煌「台湾航路から」『外地評論』第一巻第四号(一九三八年九月)。
- (8) 塚本誠「ある情報将校の記録」(芙蓉書房、一九七九年)二二四頁。この十日会に参加した宋登才「広東教育工作の先決問題」(『台湾教育』第四四四号、一九三九年七月)、駱水源「新広東の想ひ出」(『台湾之産業組合』第一六三号、一九四〇年八月)も参照のこと。因みに、総督府財務局勤務の駱は、一九三九年二月に退職して、南支派遣軍に転職する(『駱水源任府属、依願免本官』台湾総督府公文類纂第一〇二六〇冊第四九件)。戦後、彼は銀行の経営者として知られる。
- (9) 終戦直後の一九四五年八月二五日現在の「広東総領事館管内居留人口概況」によると、広東総領事館管内の日本人は五三四人、朝鮮人は三三九人、台湾人は三五一六人で、合計九一九六人であった(『在留邦人の現況』JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:C15010505800「昭和二〇・一〇 第二三軍善後処理要報」(防衛省防衛研究所))。



- (10) 広東在留の日本人は、一九四六年二月現在、集団生活をした者は六八六一名であった。彼らの生活は、廈門の日本人の待遇とは異なり、病死者が続出するほど、苦難の連続であった、とする（加藤聖文監修・編集『海外引揚関係史料集成（国外篇）』第一七巻、ゆまに書房、二二八―二三三頁）。同書収録の「終戦ヨリ最近マデノ在外邦人概況」（外務省管理局在外邦人部、昭和二十二年四月一日）によると、廈門では、「総領事館ニ措置宜シキヲ得不祥事件ノ発生ヲ防止又日本海軍及市政府ノ努力ニ依リ治安至極良好、市民ノ対日感情ハ公正ナリ」とする。一方、広東総領事の米垣興業は、中国軍に監禁されていた（『海外引揚関係史料集成（国外篇）』第三二巻、三三―三四頁）。広州と廈門における日本人のおかれた状況に差が出たのは、広東総領事館が機能しなくなったことが要因として考えられる。
- (11) 張建偉「田園将蕪胡不帰？戦後広州地区台胞处境及返籍問題之研究」『台湾史研究』第六巻一期（一九九九年六月）。戦後、広東から台湾に戻った人の貴重な体験談として、楊英正『我的父親楊燕飛』（私家版、二〇〇九年、一九頁）があげられる。楊の父の楊燕飛（一九一〇―一九九七年、眼科医）は、広東の博愛会医院での勤務をへて、一九四二年に眼科医院を開設した。終戦後、楊一家の五人は集中営に入れさせられた。一九四六年に楊一家は、定員五百人の搭載船客数を超過する二千八百人が乗っていた船で、命からがら故郷の台南にたどり着いた。戦後、楊燕飛は台湾大学医学院教授となり、この辛い中国経験から、政治に関わらずに、研究一筋の道を歩むことになる。
- (12) 台湾における汪政権研究の動向については、張同乐ほか『抗戦時期的淪陷区与偽政権』（南京大学出版社、二〇一五年）二九―三六頁を参照。
- (13) 朱徳蘭「日汪合作與広東省政府關係」『人文及社会科学集刊』第二二巻四期（二〇〇〇年一一月）。
- (14) 汪兆銘政権の國民政府公報（中國第二歴史檔案館編）などは、資料の性格上、広東省に関する情報は官職員の任免が主たるものである。また、『広東治安維持委員会公報』（一九三九年一月出版）や、『広東省政府公報』（一九四〇年五月―一九四四年四月）は、法規、派委令（人事）、会議録などに多くの紙幅が割かれているため、日本や台湾との関連を検証するための情報量は少ない。『広東省政府公報』に関しては、慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター所蔵のマイクロ資料で確認したところ、四八期のなか欠号が多い。後述の広東省主席の台湾訪問が行われた一九四二年一一月の第三期は残念ながら見当たらない。
- (15) この点をよく示す資料を紹介しておきたい。すなわち、一九三八年一二月、陸軍省軍務課長の影佐禎昭は外務省東亞局第一課長との会談で、「蔣介石政権ノ崩壊ヲ促進スル為ノ有効ナル手段トシテ執リタル処ノ広東攻略……広東占領

- ハ広東市ヲ主タル目標ニシタルモノ」と述べていた(昭和十三年二月一日から昭和十三年二月二十八日) J A C A R、RefB02031742600 (第一画像)、支那事変ニ際シ支那新政府樹立関係一件/汪精衛関係 第二卷 (A6-11-8-5-002) (外務省外交史料館)。日本軍の攻略のターゲットは、広東全域ではなく広州市を主対象としていたことがわかる。さらに、波集団司令部が一九四一年一月に調製した地図を見ると、そこには、「対敵封鎖線」とともに、各兵団の警備境界が線で示され、徴税地域と治安不良地域も示されている。この地図からも、日本軍が占領統治した地域は広東の一部にすぎなかったことがわかる(「南支軍占拠地域内治安現況要図(昭和十六年九月現在)」J A C A R、Ref. C1111473700、支那派遣軍戦時月報等綴 昭和十五年〜十六年(防衛研究所))。
- (16) 明治三〇年代初頭の広東は、東亜同文会派遣の留学生五人のほかに、数人しかいなかった、との回想がある(遠藤隆夫「四十年前の南洋と思ひ出す人々(上)」『貿易』第四〇巻第九号、一九四〇年九月)。大正期に関しては、日本居留民は、「また人口百有余に過ぎざれば其の勢力甚だ貧弱」で、主な機関や会社としては、「官衙に領事館及郵便局ありて会社側に台湾銀行三井三菱日本郵船大阪商船台湾倉庫等あり是等は皆支店出張所」があるほか、種々の雑貨を扱う個人商店が幾つかある状態で、「我が居留民の少数にして取引の大ならざるは遺憾の極と云ふべし」、とする(藤崎精四郎『台湾南支事情』新高堂書店、一九一八年、二〇六―二〇七頁)。
- (17) 商工省嘱託の貿易通信員の遠藤寛六郎によると、「広東も不変満洲事変や上海戦役の反映として抗日救国運動旺盛です。御蔭で沙面(租界)内に吾々邦人全部逃込んで、昨(一九三二)年九月より籠城生活を続けて居る次第です。沙面外には一歩も危険で出られず、毎日不愉快な生活をして居りますが、事変前までは約五百人から居た邦人が、其後便船毎に引揚げて、今では百五十人余になり……沙面内に住んで居るロクに支那語も知らない会社筋の連中どもが、会社の命令で仕方なく、百五十人今尚ほ残留して会社を見守つて居るのみです」、とする(「広東通信」『東亜経済研究』第一六巻第二号、一九三二年五月)。
- (18) 「広東一般事情」『台湾金融経済月報』第七五号(台湾銀行調査課、一九三六年一月、四二―四四頁)。因みに、小学校(一九一五年に設立)及び医院(一九一九年に開設)は、台湾総督府の支援によって維持されていた。先行研究として、中村孝志「広東日本人小学校——その成立と終焉」(『天理大学学報』第一五九輯、一九八八年九月)、「広東博愛会医院をめぐる諸問題(1)」(『天理大学学報』第一六五輯、一九九〇年一〇月)、「広東博愛会医院をめぐる諸問題(2)」(『天理大学学報』第一六六輯、一九九一年三月)があげられる。

- (19) それを端的に示す資料として、次の叙述があげられる。すなわち、「広東は地理的にいつても日本からは非常に遠いし、わづかな在住日本人に比べると、英人などは遙かに多く、貿易上から見ても対日貿易より対英貿易の方がずっと多い」とする(杉山知五郎『広東と海口』『写真週報』第七二号、一九三九年七月)。或は「経済的見地よりしても殆んど背後地を有せず、従つて目ぼしい産物を持つてゐないのみならず、近傍に南支の支関口とも称すべき香港を控へ、我が国との物資の交易も香港を経て行はれてゐた」とする(「広東に於る邦人経済活動」『新東亜経済』第三巻第五号、一九四四年五月)。
- (20) 一九三六年六月、それまで約五年間にわたり広東の半独立的状态を維持させた陳済棠は、広西の実力者らと一緒に反蔣介石の両広事変を起こしたが、失敗に終わった。香港に亡命した陳済棠の後任として、軍事権は余漢謀(広東綏靖主任)が、行政権は林雲陔(広東省政府主席)が握ることになる(中村豊一『支那革命の発祥地広東と抗日支那の關係』日本外交協會、一九三七年一〇月、一、二四頁)。蔣介石が広東をコントロールするまでの経緯については、呂芳上「中央與地方…抗戦前蔣介石中央化的策略——以蔣介石與広東陳済棠關係為例的探討」『國際東方學者會議紀要』第四五冊(二〇〇〇年)に詳しい。
- (21) 田中一二『空爆下の南支那』(大日本国防青年会台湾総支部、一九三八年)三〇頁。
- (22) 米内山庸夫「広東及広東人」『改造』第二〇巻第一号(一九三八年一月)一二八頁。
- (23) 外務省情報部『在支邦人の全面的引揚』(一九三七年九月二日)三、四、六頁。
- (24) 梯久美子『昭和二十年夏、女たちの戦争』(角川書店、二〇一〇年、一七四頁)、小山靖史『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』(NHK出版、二〇一四年、三八一—五二頁)、野林健・納家政嗣『聞き書緒方貞子回顧録』(岩波書店、二〇一五年、六一—一六頁)を参照のこと。
- (25) 中村によると、「解人夫が愈々動かぬとなると、委員の人がすぐ田舎の方へ出掛けて秘かに大きな解を買つて来て、〇〇艦〇〇の横側にそつと待機させて置いた。引揚の場合は此れで居留民諸君の荷物を、日本船迄運び込む予定であった。其の他委員は各部門に分れて聯絡運搬通信等に遺憾なきを期した」とする(中村豊一「広東」『中央公論』第五二年第一一〇号、一九三七年一〇月、一五〇頁)。
- (26) 中村豊一「広東在留邦人の引揚」『國際知識及評論』第一七巻第一二号(一九三七年二月)五四頁。
- (27) 参謀本部「中南支ニ於ケル抗日並居留民ノ引揚状況(八月十一日迄)」(一九三七年八月二日、海軍軍令部第六課

「居留民引揚関係綴」昭和館所蔵)。

- (28) 中村豊一「広東引揚げの前後」『内外公論』第一六卷第一一号(一九三七年一月)。浅居誠一編『日清汽船株式会社三十年史及追補』(日清汽船株式会社、一九四一年)一一八頁。因みに、広東引揚者の体験としては、松田祐麿(広東博愛会医院歯科)「広東脱出記」(『臨床歯科』第一〇巻第一号、一九三八年一月)などがあげられる。
- (29) 前掲『在支邦人の全面的引揚』二六一―二七頁。
- (30) 当時、漢口攻略が日本国内においていかに関心が持たれていたかを示す例として、二つの座談会をあげることができる。一つは、一九三八年八月二六日に行われたものである。出席者は、高木陸郎(中日実業副総裁)、清水盛明(内閣情報部、陸軍大佐)、松村秀逸(陸軍省新聞班、陸軍中佐)、沖野亦男(海軍中佐)、町田梓楼(東京朝日新聞論説委員)、岩淵辰雄(政治評論家)、吉岡文六(東京日日新聞東亜課、山本実彦(改造社長)であった(漢口陥落後はどうなる)『大陸』第五号、一九三八年一〇月)。もう一つは、九月七日に行われたものである。出席者は、尾崎秀実(中国評論家)、清瀬一郎(衆議院議員)、神田正雄(中国研究家)、高木陸郎、松本忠雄(外務政務次官)であった(漢口攻落の重大転機)座談会『文芸春秋』第一六巻第一七号、一九三八年一〇月)。
- (31) 「断乎―広東攻略すべし座談会」『文芸春秋』第一六巻第一八号(一九三八年一〇月)。
- (32) すなわち、匠瑛は、「広東は珠江を上つて行くのは非常に困難だ。無論閉塞をせうし、揚子江よりむづかし。だから広東と××との間に××××がある。あ、いふ所に上るのがよくはないかと思ふ」と述べた後に、井上は、「何処かに上つて、それから惠州へ行つて、東江といふ江を渡つて増城から広東の東のトーザンに出る」と述べた。
- (33) 「『香港・広東』を語る座談会」『実業之日本』第四一巻第二二号(一九三八年一〇月)。
- (34) 角田順(校訂)『宇垣一成日記2』(みすず書房、一九七〇年)一一五九頁。
- (35) 「九月四日宇垣大臣ノ石射ヘノ内話(私邸ニ於テ)」JACAR、RefB02030573400(第一一二画像)、支那事変関係一件 第三十巻 (A1-10-30\_030) (外交史料館)。
- (36) 「広東出兵ニ関スル外務当局ノ意見(十三年九月五日)」近衛文麿文書リール三(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。
- (37) 「命 巻四 三部の内三号」JACAR、RefC14060918400(第一一二画像)、大陸命 巻〇四(第〇二〇一―〇三〇〇号)昭和二三・〇九―一四・〇五(防衛研究所)。
- (38) 宮崎繁三郎(初代の広東特務機関長)の回想を参照のこと(増澤道子『寡黙の人』甲陽書房、一九八七年、四八頁)。

- (39) 大宅壮一『外地の魅惑』(萬里閣、一九四〇年)二六七―二六八頁。
- (40) 『堂々バイアス湾に上陸す』『写真週報』第三七号(一九三八年一月)。「広東・漢口攻略戦」同第三八号(一九三八年一月)。「広東陥落」同第三九号(一九三八年一月)。
- (41) 例えば、『海と空』第七卷第一六号(一九三八年二月)では、「バイアス湾を圧する我海軍の威容」「バイアス湾に集結された我輸送船隊」「敵前上陸直前の歴史的瞬間」「南支猛爆に待機する海の荒鷲」を写真入りで紹介した。
- (42) 『週刊朝日』第三四卷第二〇号(一九三八年一月)や、『国際写真新聞』第二一八号(一九三八年一月)、『世界画報』第一四卷第一二二号、「南支方面某飛行基地を御視察中の秩父宮殿下」『海軍グラフ』第七卷第一号(一九三九年一月)、品川幸雄「南支軍最高指揮官古荘中将与塩澤中將」『実業之日本』第四一巻第二三三号(一九三八年一月)などがあげられる。
- (43) 『広東陥落の快報に轟く!愛国行進曲』『台湾日日新報』一九三八年一月二三日などがあげられる。以下、『台日』と略す。
- (44) 『日本の南支進軍と其目標』(一九三八年一月三日)、「広東作戦は抗日への止」(一月二五日)、「蔣介石は何処へ行くか」(一月二八日)があげられる。
- (45) 呉淑鳳「抗戦初期的広東戦局(1937-1938)」『栄耀的詩篇』(国防部部弁室、二〇〇六年)。張瑞徳等『抗日戦争与戦時体制』(南京大学出版社、二〇一五年、六六一―六七頁)。
- (46) 郭岱君主編『重探抗戰史(一)』(聯経、二〇一五年)一九五、四七九頁。
- (47) 『両広政治日誌送付ノ件』J A C A R、RefB02031810300。支那地方政況関係雑纂／南支政況 第六卷(A-6-13-1\_1\_006)(外交史料館)。
- (48) 一九三八年一月一日香港発、同一日外務省着「在広東総領事館」J A C A R、RefB14090352700(第三画像)、在支帝国公館関係雑件／再開関係(M-130-2\_8)(外交史料館)。
- (49) 内藤英雄『広東福建読本』(東亜実業文化協会、一九三九年)二五六―二五七頁。
- (50) 角田順(解説)『現代史資料(10)』(みすず書房、一九六四年)四四二―四四六頁。
- (51) 『南支作戦に伴う政務処理要綱』J A C A R、RefB02030524700。支那事変関係一件 第四卷(A-1-10-30\_004)(外交史料館)。

- (52) 一九三八年一月六日台湾軍発、同日陸軍省着「南支処理ニ台湾総督府ヲ干与セシメサル件」J A C A R、Ref: C04120624300、昭和十三年「陸支密大日記 六二二号」（防衛研究所）。
- (53) 「漢口、広東及海南島各方面重要事項処理ニ関スル陸、海、外三省及興亜院申合ノ件」J A C A R、Ref: B02030543300、支那事変関係一件 第一五卷 (A-1-1-0-30、015)（外交史料館）。
- (54) 「漢口及広東に連絡員派遣に関する件」J A C A R、Ref: C04121291700、昭和十四年「陸支受大日記 第五四号」（防衛省防衛研究所）。
- (55) 同注五一。
- (56) 「広東放送局建設に関する件」J A C A R、Ref: C04120718700、昭和十四年「陸支受大日記 第二号 三／三」（防衛研究所）。
- (57) 「電気水道復興要綱に関する件」J A C A R、Ref: C0412075800、昭和十四年「陸支受大日記 第一三号 一／二」（防衛研究所）。
- (58) 「南支支那人小学校教科書編纂に関する件」J A C A R、Ref: C04120748000、昭和十四年「陸支受大日記 第八号 二／二」（防衛研究所）。
- (59) 「菅向荣任台湾総督府師範学校教諭」台湾総督府公文類纂第一〇一〇九冊第三七件。徐向荣（本籍台湾新竹州太湖郡）は、一九二一年に台湾総督府師範学校を卒業した後に上京し、一九二五年に東京高等師範学校を卒業し、同年、台湾総督府師範学校教諭となった。翌年、彼は、日本人と養子縁組をして、姓を菅に改めた。
- (60) 前掲「広東治安維持委員会公報」二〇二頁。
- (61) 広東治安維持会編纂発行の教科書は、筆者が確認したところ、筑波大学附属図書館に数冊しか保存されていない。
- (62) 『戦時体制下に於ける事業及人物』（東京電報通信社、一九四四年）一二六頁。因みに、戦後、台湾で出版された『中華民国名人伝之四』（世界文化服務社、一九五九年、一一七頁）では、この経歴に関する記述は省かれていた。同書では、当時、台北市立大同中学校長の徐は、「民族精神教育」の提唱者として褒め称えられた。このように、履歴の書かれ方が台湾の政治状況とともに変わったことが伺える。
- (63) 「文教局後援で教科書を編纂」「親日教材を取り入る菅向荣教育顧問の談」「台日」一九三九年八月一日。現在の「広東陸軍特務機関旬報」によれば、「七月十五日華南教員訓練所ニ入所セシメ訓練中ノ男女生徒百九十九名ハ八月十五日

- 一ヶ月ノ修業課程ヲ終ヘ同日第一回卒業式ヲ举行」し、同日午後、この第一回卒業生で広東市小学校教員聯盟結成式が行われたことがわかる。「特務機関旬報第一四号送付の件」〔J A C A R、Ref:CO4121390500（第四、六画像）、昭和四年「陸支受大日記 第六一号」(防衛研究所)〕。
- (64) 「特務機関旬報第一五号送付の件」〔J A C A R、Ref:CO4121440000（第七、四〇、四一画像）、昭和十四年「陸支受大日記 第六五号」(防衛研究所)〕。「広東向けの教科書三十万冊を印刷」〔台日〕一九三九年九月三日。
- (65) 「留台学警座談会」『新亞評論雜誌月刊』第七卷五期（一九四二年一月）。
- (66) 「広東から留学生」〔台日〕一九四〇年三月二十六日。「南支調査会と広東留日学生」〔南方〕第三卷第一号（一九四一年一月）。陳済同「留台近況」『瀛友』創刊号（中日文化協会広東省分会、一九四四年）。
- (67) 「広東から看護婦の勉強に四女性」『医学に結ぶ日華親善』〔台日〕一九四一年五月二日、一〇月八日。看護婦の感想として、陳淑華「台湾帰後の簡載」〔婦女世界〕第二卷一〇期、一九四一年一〇月）がある。因みに、一九三九年、南支派遣医療団に加わり広東に渡った長谷川正（台北市立健康相談所の嘱託医）は、広東伝染病院在勤中に、「午後の一時間をさき、中国人の見習看護婦に日本語の勉強を兼ねて病氣別の食餌療法を教えていたが、傳、董、俞の三人は成績が良く、後に推薦されて台北帝大付属病院に留学し、日本の正規看護婦の免許を獲得した」と回想している（長谷川「追憶」著者発行、一九八三年、一一二頁）。
- (68) 「憧れの台湾へ」〔台日〕一九四一年七月一二日。一七人のリストは、林清芬「中央與地方政府對留學教育的政策與措施」『中華民國史專題第五屆討論會論文集』（國史館、二〇〇〇年）に掲載されている。
- (69) 原田の事績は次の資料による。「広東敏存職業学校へ」〔ミシン〕機械寄贈 昭和十年十月」〔J A C A R、Ref:BO5016040000、寄贈品関係雑件 第一四卷（H:6-2-0-26-014）（外交史料館）、「広東女子美術職業学校 昭和十四年」〔J A C A R、Ref:BO5015859300、助成関係雑件 第五卷（H:6-2-0-1-005）（外交史料館）、外務省情報部「支那人ノ日本語及日本事情研究状況」（一九三〇年、九〇頁）、原田武子「漢奸狩りを見る」『話』第七卷第四号（一九三九年四月）、「今ぞお役の通訳に」『東京朝日新聞』一九三八年二月一五日、山本実彦「渦まく支那」（改造社、一九三九年、一一三—一二七頁）、淡谷悠蔵「広東覚え書」『東亜聯盟』第二卷第一二号（一九四〇年一月）。
- (70) 「南進知識の殿堂に憧れる若人の群」〔台日〕一九四一年一月二二日。原田の長男は、東京の多摩美術学校に留学していた（亡夫の遺志を継いで）『南支日報』一九四二年一月一四日）。

- (71) 「広東省から台湾留学生」 「広東省政府派遣留学生一行来台」 「広東留学生囲み座談会」 「日華泰三国親善譜」 「台日」 一九四二年三月五日、三月八日、六月七日、九月二四日。
- (72) 霍は台北州立台北第一中学校を経て、一九四四年に台北高等学校に入学した。戦後台湾大学数学系卒業後、助教を務め、一九五四年、留学試験に合格して、元台北高校教授の森岡栄（九州大学助教授）等の保証により、東京都立大学の留学を叶えた。その後ウエイン州立大学で教えることになる。以上の経歴は次の資料による。「新生中国を双肩に勉学の励む学徒群」 『興南新聞』 一九四二年一月三〇日、霍「関於高等学校」 『瀛友』 創刊号、『台北高等学校』（一九二二年—一九四六年）（蕉葉会、一九七〇年、一〇八頁）、林清芬編『台湾戦後初期留学教育史料彙編——留学日本事務』（国史館、二〇〇三年）。
- (73) 呉のことについては、呉克泰『呉克泰回憶録』（人間出版社、二〇〇二年、九九頁）、呉佳璇『台湾精神医療の開拓者——葉英堃伝記』（心靈工場文化、二〇〇五年、七四頁）に言及がある。康については、「清朝の忠臣康有為の孫娘で康保敏と名乗った。日本語が私たちには上手でなかったもので、よく私たちからノートを借りていた」という回想がある（楊蓮生『診療秘話五十年——台湾医の昭和史』中央公論社、一九九七年、四一頁）。
- (74) ある留学生は、台北の吉見裁縫学園の経営者に対して、「私達は汪政府の方から来ているので同じ本国でも進駐して来た政府は敵です……先生是非残って私達を助けて下さい」と泣きすがった（吉見まつよ『波浪の舵』吉見学園、一九七〇年、一二六—一二七頁）。また、台北帝大附属医学専門部に入学した康保敏ほか二人は、教育部の役人に呼び出された。その結果、留学生の資格は取り消されて、官費の支給も中止された。ただし、「漢奸」の罪は追究されないので、引き続き勉強できた、とする（黄称奇『擲旗の時代』悦聖出版社、二〇〇一年、一七一—一七二頁）。
- (75) 小磯国昭『葛山鴻爪』（丸の内出版、一九六八年）六九六頁。
- (76) 「昭和十五年六月一日から昭和十五年七月一日」 J A C A R、RefB02031670800、支那人消息雑纂 第四卷（A-61-01\_004）（外交史料館）。
- (77) 福永文夫・下河辺元春編『芦田均日記一九〇五—一九四五』第四卷（柏書房、二〇一二年）三二六—三二八頁。
- (78) 陳耀祖「広東を復興するの途徑」 『財政』第五卷第九号（一九四〇年八月）。
- (79) 陳は、名古屋帝国大病院で治療を受けた汪兆銘の見舞いに行けずに、生涯を閉じた（『満州・支那事変見聞録 語っておきたいことども』勘十会、一九六八年、二〇頁、防衛研究所蔵、登録番号・支那—参考資料—四）。日本政府は、



- 陳に勲二等旭日重光章を贈与した（「故中華民國元広東省省長陳耀祖叙勲の件」A10113498700、国立公文書館。老蘇生「陳広東省長耀祖追悼法要に就て」『大日』第三一三三号、一九四四年四月）。陳の後任の陳春圃も、終戦直前の褚民誼省長も汪夫人の一族であった。
- (80) 『自昭和十三年十一月（復帰）至全十四年十二月 広東情報』（台湾銀行所蔵日治時期文書、中央研究院台湾史研究所の台湾史檔案資源系統より引用、識別号：T0868\_01\_01242\_0616、第四〇、七二画像）。
- (81) 南支派遣軍報道部編『広東誌』（広東東洋文化研究所、一九四〇年）三八〇頁。当日の光景は、「彭東原委員長呂春栄副委員長ヲ中心ニ八千餘ノ會員集合結成式ヲ挙行シ終ツテ約三百台近クノトラックニテ蔣政權ノ排撃ト防共ノ大旗ヲ揚ゲ市内ヲ行進シ」た、と伝えられた（『広東情報』第一四〇—一四一画像）。
- (82) 「軍務課 広東訪日経済視察団に関する件」J A C A R、RefC07091184900、昭和一四・六・七—一四・六・三〇 陸支普大日記（防衛研究所）。「広東訪日経済視察団座談会」『華南の経済開発と日本及日本人』『興亜産業経済大観』（実業之世界社、一九三九年一〇月）。
- (83) 「広東訪日婦女団団員名簿及日程の件」J A C A R、RefC04121106600、昭和一四年「陸支受大日記」第三七号（防衛研究所）。「広東訪日婦女団座談会」『部報』第六七号（一九三九年七月）。石心蓮（広東婦女維持会会長）「訪日帰来個人之観感」『華文大阪毎日』第三卷五期（一九三九年九月）。
- (84) 「広東特務機関 広東治安維持会副委員長一行視察旅行の件」J A C A R、RefC07091339900、昭和一四・一一・七—一四・一一・三〇 陸支普大日記（普）（防衛研究所）。「対岸から親善視察団続々来る」『台湾自治評論』第四卷第一一月号（一九三九年一月）。
- (85) 「汕頭訪日視察団陸軍部隊及同学校見学の件」J A C A R、RefC04122481900、昭和一五年「陸支密大日記」第三八号 一／二（防衛研究所）。
- (86) 「広東市長ら入京」『朝日新聞』一九四〇年一〇月三〇日。彭は、真崎甚三郎等と会っていた（伊藤隆ほか編『真崎甚三郎日記』昭和一四年一月—昭和一五年二月、山川出版社、一九八三年、四九八、五〇三頁）。
- (87) 「広東市立小学校長一行見学に関する件」J A C A R、RefC07091768200、昭和一六年「陸支普大日記第一号」（防衛研究所）。詳しい報告は、国立台湾図書館所蔵「広州市立小学校長日本教育視察団報告書」がある。
- (88) 「広東からの訪日視察団員」『台日』一九四一年一月二日。

- (89) 一例として、広東訪日経済視察団と在日華僑との会合を紹介しておきたい。すなわち、一九三九年六月二日夜、神戸の華僑の代表(陳澍彬、許慕唐、王重山)は、同視察団を宴会に招いて、広東の状況について質問していた。同視察団は、日本軍が広東のために尽力したことや、治安維持会が広東各地を維持したこと、そして彼らが見做おうとしたことなどを述べ、華僑を感じさせた、とする(『広東訪日経済視察団報告書』国立台湾図書館所蔵)。
- (90) 秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』(東京大学出版会、一九九一年)一四六頁。
- (91) 「汪兆銘與廣州等地往返函電(一)」(国史館所蔵汪兆銘史料、典藏号:118-010100-0025-017)。中国第二歴史檔案館編『汪偽政府行政院會議録』第一六冊(檔案出版社、一九九二年)二二八頁。
- (92) 唐沢は、一九二三年に早稲田大学卒業後、朝日新聞を振り出しに、各社の記者をしていた。台湾では、台湾日日新報記者(一九二五年に入社)、新高新報社長、台北市會議員(一九三五年に当選)を歴任した。一九四五年八月一日、広東迅報社の多くの職員らは、唐沢の社長室で玉音放送を聞いている(王詩琅『台湾人物表録』徳馨室出版社、一九七九年、一二七頁)。唐沢は、「無条件降服の悲報に接し九ヶ月にわたる捕虜生活を終え」て、郷里の長野県に戻り、松本市議會議員等を歴任した(唐沢『新聞人の叫び』信陽新聞社、一九五二年、一頁。同『茶の間の話題』文化春秋社、一九六四年、三四六頁)。一九七五年一月、静岡県でなくなった(『高遠町誌』人物篇、一九八六年、一三二頁)。著書に『黎明の台湾』(新高堂書店、一九二七年)、『明日の台湾』(新高新報社、一九二九年)、『台湾島民に訴ふ』(新高新報社、一九三五年)、『私の生活記録』(一九五六年)、『政治と社会』(鶴林堂書店、一九五九年)がある。
- (93) 同新聞社の漢文部長の林宝樹、対華部長の徐毓英は、台湾出身であった(山本喜代人編『華南商工人名録』国際情報社広東支局内華南商工人名録発行所、一九四三年、九二―九三頁)。
- (94) 「明朗広東を語る」『兵隊』第九号(一九三九年一〇月)。
- (95) 同社の所在地(長堤新填地一号)には、のちに興亜院派遣員事務所や広東日本商工会議所も入っている(森良治編『中華民国・満洲国商工録』亜細亜年鑑発行所、一九四〇年、一二五頁)。同ビルは、日本人の重要な拠点となっていたと考えてよい。
- (96) 野依秀市『南北支那現地要人を敲く』(秀文閣書房、一九四〇年)一三七頁。
- (97) 山田毅一『南支皇軍慰問の旅(三)』『南進』第五卷第一号(一九四〇年一月)。
- (98) 杉田才一『新生の広東経済』(同盟通信社、一九四二年)五一―五五頁。「一年来的広東新建設」『新亜』第八卷一期

(協栄印書館、一九四三年一月) 八―九頁。既述のように、日本軍の広東攻略後、台湾総督府による占領地協力は、現地の三省連絡会議の要請に基づいて行われた。この広東省営工場に関する調査も、同会の要請により、総督府は調査団を広東に派遣し、製糖などの工場に関する調査を実施させた(台湾総督府外事部編『支那事変大東亜戦争二伴フ対南方施策状況』一九四三年、一六五頁)。

(99) 「昨赴台湾公式訪問」陳主席在台湾会見記者団発表談話『廣東迅報』一九四二年一月三日、一月七日。

(100) 「陳省主席訪問台湾備受官民盛大歡迎」『台湾總督盛宴招待』『廣東迅報』一九四二年一月六日、八日。

(101) 「出席軍司令官宴会」『廣東迅報』一九四二年一月七日。

(102) 「懇談經濟各問題」『廣東迅報』一九四二年一月九日。陳が台北の鉄道ホテルで開く催しの招待状は、「陳耀祖書簡」として、総督府交通局総長であった副見喬雄の關係文書(憲政資料室所蔵)に保存されている。

(103) 「訪台公畢昨日返粵」『訪問台湾後觀感』陳主席報告訪台經過『廣東迅報』一九四二年一月一〇日、一一日、一二日。

(104) 「汪兆銘與廣州等地往返函電(二)」(汪兆銘史料、典藏号：118-010100-0026-055)。

(105) 「歡迎台湾答礼使蒞粵」『廣東迅報』一九四二年一月一〇日。

(106) 「昨日乘機抵粵情形」昨拜訪省市政府「前日飛抵香港情形」『廣東迅報』一九四二年一月一〇日、一一日、一四日。「建設に励む現地官民台湾の協力に感謝」「相触れる心の琴線躍進広東の多幸を祈念」『台日』一九四二年一月一四、一七日。

(107) 「陳省主席昨晨赴台湾拜訪總督及軍司令官」一九四二年一月三日。「陳主席一行抵台北備受軍官民大歡迎」一月五日。「陳省主席一行出席台湾總督招待宴」一月六日。「陳省主席在台湾会見記者団発表談話」一月七日。「陳主席遊台北名勝台督盛宴招待」『粵台之間』一月八日。「陳省主席隨員与台湾実業界懇談」一月九日。「陳省主席訪台公畢昨偕各員乘機返省」一月一〇日。「陳省主席對記者談訪問台湾後觀感」一月一日。

(108) 「平和に蘇る広東」『旅』第一六卷第四号(一九三九年四月)。

(109) 大蔵省管理局『日本人の海外活動に関する歴史的調査』第一八卷中南支編(ゆまに書房、二〇〇二年)一二四―一二五、四六三頁。

(110) 『海外日本実業者の調査』第七卷(不二出版、二〇〇七年)二二五―二二六頁。

- (111) 『海外日本実業者の調査』第八巻、一一二―一一七頁。広東に渡った台湾人については、従来あまり語られてこなかったが、戦後名をなした実業家もある。戦後台湾の大企業である東元電機機廠股份有限公司の偕林波士は、専修大学卒業後、戦時下の広東に赴いて、水産会社に勤めたと回想している(李庭蘭『創造財富的人』第一集、経済日報社、一九七六年、二二四―二二五頁)。こうした会社、事業の実態についての検証は、今後の研究がまたれるが、ここでは一例として、台湾人の林清経を紹介しておきたい。一九三九年二月現在「在外本邦実業者調」によると、林の「ハヤシ製作所」は、日本人二人、中国人五三人を雇っていた。林は、一九四〇年九月二十八日、台湾人の有力者の林献堂を訪問し、広東で設立した鉄工場の建設などについて語っていた(許雪姬編『灌園先生日記』第一二冊、中央研究院台湾史研究所、二〇〇六年)。
- (112) 遠藤寛六郎(商工省貿易通信員)によると、「本邦各界有力商社ハ殆ンド嚮ヲ並ベテ広州市ニ進出、夫々貿易ニ、金融ニ、開発ニ力強キ活動ヲ開始シテキル(中略) 枚挙ニ遑ナク花形会社ハ殆ンド網羅」されている、とする(『最近広東ノ展望』(一九四〇年二月、手書き、公益財団法人東洋文庫所蔵)。
- (113) 平野健編『広東之現状』(広東日本商工会議所、一九四三年)三〇〇―三〇一頁。同書収録の資料は、一九四一年八月二〇日時点の調査と書かれていたが、「昭和十五年八月迄」と書かれた資料(田中備「南支那(広東)・台湾連繫の方途」『台湾時報』一九四三年一月)もあるため、実際の投資額は、より多かつたと考えられる。
- (114) 大園市蔵編『長谷川南方総督の巨歩』(新時代社台湾支社、一九四一年)一一―一三頁。同書は、呉三連台湾史料基金会(台北)に所蔵されている。
- (115) 長谷川は、台北帝国大学で開かれる日本社会学会大会の出席者や、「文芸戦後運動で渡台する火野葦平、久米正雄、吉川英治の作家たち」と同船して、「大へんにぎやかであった」という(桜井庄太郎「台湾の旅から」『社会学徒』第一五巻一号、一九四一年一月)。
- (116) 長谷川清「南方発展と台湾統治」『国民知識』第八巻六号(一九四一年六月)。同「南進基地としての台湾の重要性」『南』第一輯(台湾総督府情報部、一九四一年一月)。
- (117) 「長谷川総督廈門へ」『復興廈門の面目躍如』『台日』一九四二年五月二七日、六月六日。
- (118) 写真帖の画像閲覧は、中央研究院台湾史研究所檔案館の協力を得た。
- (119) 台湾居留民会三十五周年誌編輯委員会『廈門台湾居留民会創立三十五週年記念誌』(廈門居留民団、一九四二年)。

- (120) 河野司「長谷川総督と海南島」『長谷川清伝』(長谷川清伝刊行会、一九七二年)二九五頁。河野司編『海南島石碌鉄山開発誌』(石碌鉄山開発誌刊行会、一九七四年)四六二頁。一九八二年、河野は、三六年ぶりに海南島を訪ねて、かつての海南島開発者の立場で、日本が現地に残した「遺産」の状況を記している(河野司「再見、四十年 中国海南島紀行」一九八三年、双流社)。
- (121) 「傷病勇士を慰問」『台日』一九四三年四月二二日。
- (122) 「長谷川総督出発」『台日』一九四三年四月一日、「海口に到着」「長谷川総督広東着」四月二〇日、「南方建設に益々努力」四月二五日、「日華親善風景展開」四月二七日、「長谷川総督、広東に於る動静」四月二八日、「長谷川総督視察、広東歓喜」五月二日。
- (123) 「台湾、南方建設に協力」『朝日新聞』一九四三年四月二五日。
- (124) 一九二八年七月、総督着任後の川村は、自ら直接南洋各地を視察することを考えた。結局、田中義一内閣の退陣に伴い、川村も総督の座を離れたため、彼の南洋訪問計画は実現せずに終わった。
- (125) 「大東亜隣組と台湾の立場」『台日』一九四三年四月二七日。
- (126) 「不可分の隣組南方脈打つ台湾の底力」『台日』一九四三年五月一日。
- (127) 「民國三十二年汪兆銘與廣州各方往返函電(一)」(汪兆銘史料、典藏号：118-010100-0028-024)。
- (128) 「斉藤長官近く比島へ」「比島開発へ積極協力」『台日』一九四二年五月一三日、五月三〇日。「斉藤総務長官南方へ」『台日』一九四三年八月五日。「台湾の南方協力強化」「何処でも評判のよい現地の台湾関係者」『台日』一九四三年九月四日。

王 麒銘(おう きめい)

所 属 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程三年  
 専攻領域 台湾近代史